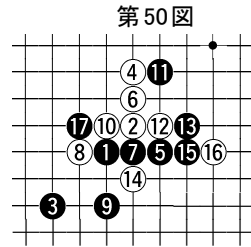


# 彗星ガイド (6)

九段 河村典彦

今回は、白4に対する黒5の変化が中心だが、かなりの苦戦を覚悟しなければならぬ。

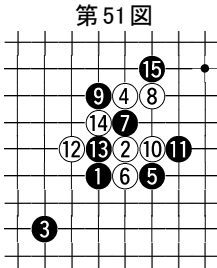
【第50図】前回からの白4に、黒5は成立するが、白の対応も複数あるだけにそれぞれの打ち方を知っておかないと痛い目に遭う。



単純に白6から白8と止めておく手もある。ここで黒9と打てるのが、3に石がある効果である。しかしそれでも白10からの攻めに耐えなければならぬ。白12に対し黒13と一旦先手は取れるが、黒15と四ノビをしなければならぬのが少々辛い。黒

17まで止めてしまえば白の攻めを受け止める必要がある。

【第51図】白6と中に飛び込む手もある。黒7に白8と上から押さえられて、なかなか3の石を活用できない序盤となる。素直に白10と押さえられて、白の方が石が密集して

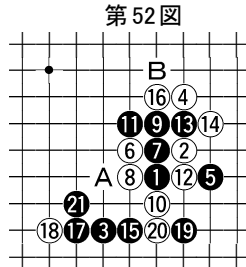


いる分黒は苦勞する。

白12からいろいろ打つ手があると思うが、例えば白12なら黒13と止め、白14に黒15と止めておいてこれからの一局である。この展開は白も黒3の石を意識して戦う必要があるため、白の方にも苦勞が

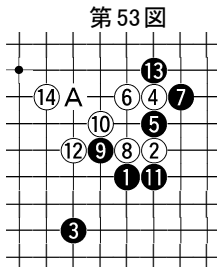
多い。白は途中で変化ができるため、事前に作戦を用意しておけば実戦では勝率が上がるだろう。

【第52図】この白6も当然考えられる。黒7ではAと打ちたいが、ちよつと無理そうなので黒7と防いでおく。白8には黒9と乗り込んでいき、しばらくは上辺の白模様をつぶすこととなる。その代わり、黒の下辺の模様も消えてしまう。それでも3の石を生かして黒15と叩き、下辺での足がかりを作る。白16と上辺に手を入れれば、黒17から21と構えてこれからだ。白16ではBと先手を



取る手もあるので、一筋縄ではいかないだろう。

【第53図】黒5の五題目。黒5ではとにかく上からかぶせていきたい。黒7、9はやむを得ないだろう。白10とあくまで上辺で密集するのが白の作戦である。黒11と黒も反撃含みに防ぐことになる。白12と一本引き、黒13に白14と打つ展開は、黒にとっては望ましくないだろう。かと言って、黒13を反対なら、白14をAに打たれてこれも困る。



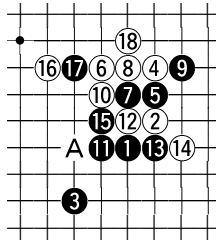
元々黒5と打った時点で3の石から大きく離れているので、あまりよくなる展開には期待できない。ただし、白に攻めさせて、攻めあぐねたところをカウンターで逆転するというのも作戦の一つなので、必ずしもこの5が悪いという訳ではない。花月切り違いの浮か

ぶきもこの5が悪いという訳ではない。花月切り違いの浮か

し止めに近い考えだろうか。

【第54図】白6とさらにかぶせてくる手も考えられる。黒7なら白

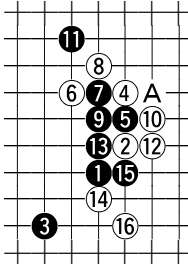
第54図



の2つの形はセットで覚えておいた方が便利だろう。

【第55図】黒の可能性は黒7と打つぐらいであろうか。これには白

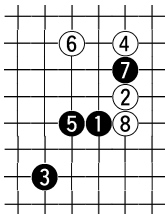
第55図



この黒5は選ばない方が無難だろう。

【第56図】最後に黒負けの五珠を追加しておこう。

第56図

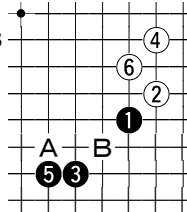


この黒5には白6と打ち、黒7と我慢して入ってきた手には、意外にも白8と打つておいて必勝となる。この手は確かに黒の二連を押さえてはいるが、ピンとくる手ではない。ただ、放置すれば三々禁なので黒は放置できず、防ぐ手もないというのが自

慢である。

【第57図】黒5で5やAやBの呼手ではない手を打てば、白は6と堂々と固まっておけば良い。白6で他の手も

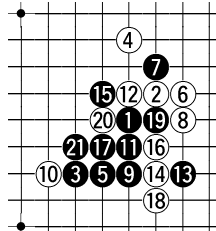
第57図



あるだろうが、呼手としては白6の方が普通だろう。白3本の二連をけん制する手はなかなか見つかからない。黒の他の手はこれまでの知識を応用すれば答めることができるだろう。

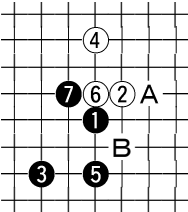
【第58図】紙面がまだ余っているので次の白4に移ろう。白4の桂馬は過去やった白4の間にあるのであまり打てないようにも見えるが、実は打てる場所が多い。6か所が打

第58図



さらに白8と攻めて来たら、黒9から追い勝ちをすれば良い。黒21まで白は四ノビで防いでも防ぎきれない。

第59図



【第59図】黒5も当然打てる場所、白6なら黒7で問題ない。白6をAなら、黒はBの要領だ。白4が一路右にあれば黒5は打てなかったが、一路左の違いだけで必勝になる。一路の違いをかみしめることが多いのが、彗星でもある。